岩波講座
日本文学史 第五巻 中世

# キリシタン文学

森田 武

岩波書店

# キリシタン文学

森田　武

# 一

一般にキリシタン文学という時は、十六世紀中葉の天文末年から十七世紀初頭の寛永年間までの約百年間に、カトリック教会の外国人宣教師、特に耶蘇会士と、これに協力した日本人信徒の手に成った文学をさす。その制作の目的から見て、宗門書が中心をなすのは当然であるが、間接に伝道に役だつ教外書をも含んで、洋書の翻訳があり、新編の書があり、わが国古典の口語訳もあれば複刻もあって、多種多彩である。その編纂の企画・制作および出版に、外国人宣教師が主導的な役割を果たしているのが注意され、内容に新来の思想を盛ったことはもちろん、用字・用語・文体にも新味を出すなど、わが中世文学の中に特異な位置を占めるものと言わなければならない。

フランシスコ＝シャヴィエル Francisco Xavier（永正三年―天文二年 一五〇六―一五五二）は、天文十八年（一五四九）来朝後間もなく教義書を作ったし[1]、その後多くの人々が種々の書を編んだが、古いものは伝わらず、現存するのは大部分版本である。しかも国内出版物はみな耶蘇会の刊行にかかり、それも文禄慶長年間のわずか二十年間に限られる。かように集中的な出版を見たのは、一つには天正十八年巡察使アレッシャンドロ＝ワリニャノ Alexandro Valignano（天文六年―慶長一一年 一五三七―一六〇六）によって活字印刷機がもたらされ、それまで写本で行われたものが出版されるに至ったためである。しかしまた、天正十五年（一五八七）初度の禁教令が発せられ、慶長元年（一五九六）冬には二十六聖人の殉教を見たような時世であって、家康のころ一時緩和したとはいえ、自由な布教活動は次第に制約され、文書による伝道が重要な手段となったからでもある。つまり宗門の禁圧は、一面キリシタン文学の制作・出版を促したのである。

さて、キリシタン版のうち、日本語でものされた文学書は、次の表に示すとおりである。

| 書名 | 巻 | 冊 | 文体 | 用字 | 刊年 | 刊地 | 所在 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| サントスの御作業 | 二 | 一 | 文語 | ローマ字 | 天正一九一五九一 | 加津佐 | ボドレイ文庫(オックスフォード大学) |
| 信心録 | 四 | 一 | 文語 | ローマ字 | 文禄元一五九二 | 天草 | ライデン大学図書館(オランダ) |
| ドチリナ・キリシタン | | 一 | 文語 | ローマ字 | 文禄元一五九二 | 天草 | 東洋文庫 |
| どちりいなきりしたん | | 一 | 文語 | 国字 | (文禄元一五九二) | (天草) | バルベリニ文庫(ヴァチカン) |
| ばうちずもの授けやう | | 一 | 文語 | 国字 | (文禄元一五九二) | (天草) | 天理図書館 |
| 平家物語 | 四 | | 口語 | ローマ字 | 文禄元一五九二 | 天草 | 大英博物館 |
| 伊曾保物語 | 二 | 一 | 口語 | ローマ字 | 文禄二一五九三 | 天草 | 大英博物館 |
| 金句集 | 一 | | 文語口語 | ローマ字 | 文禄二一五九三 | 天草 | 大英博物館 |
| コンテムツス・ムンヂ | 四 | 一 | 文語 | ローマ字 | 慶長元一五九六 | (天草) | ボドレイ文庫、アンブロシオ文庫(ミラノ) |
| サルヴァトル・ムンヂ | | 一 | 文語 | 国字 | 慶長三一五九八 | (長崎) | カサナテ文庫(ローマ) |
| ぎやどべかどる | 二 | 二 | 文語 | 国字 | 慶長四一五九九 | (長崎) | 大英博物館、パリ国立図書館(零本)天理図書館その他 |
| ドチリナ・キリシタン | | 一 | 文語 | ローマ字 | 慶長五一六〇〇 | (長崎) | 水戸徳川家、アポストリカ文庫(ヴァチカン) |
| どちりなきりしたん | | 一 | 文語 | 国字 | 慶長五一六〇〇 | 長崎 | カサナテ文庫 |



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| おらしよの飜訳 | | 一 | 文語 | 国字 | 慶長一六〇〇五 | 長崎 | 天理図書館 |
| 倭漢朗詠集巻之上 | | 一 | 文語 | 国字 | 慶長一六〇〇五 | (長崎) | サンロレンソ文庫(スペイン) |
| スピリツアル修行 | | 一 | 文語 | ローマ字 | 慶長一六〇七一二 | 長崎 | 大浦天主堂(長崎)〈国字写本〉東洋文庫 |
| こんてむつすむん地 | 四 | 一 | 文語 | 国字 | 慶長一六一〇一五 | 京都 | 天理図書館 |
| ひですの経 | | 一 | 文語 | 国字 | 慶長一六一一一六 | 長崎 | 現在所在不明 |
| 太平記抜書 | 六 | 六 | 文語 | 国字 | (慶長一五九八—一六一四三—一九) | (長崎) | 天理図書館 |

＊（　）は推定によることを示す。

なお、耶蘇会よりもはるかに遅れて日本の伝道に加わったドミニコ会にも数種の出版物(海外出版)がある。

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ロザリヨ記録 | | 一 | 文語 | ローマ字 | 元和一六一二八 | ビノンド(マニラ) | ドミニコ会修道院(マニラ) |
| ロザリヨの経 | | 一 | 文語 | ローマ字 | 元和一六一二九 | ビノンド | 聖トマス大学(マニラ) |
| コリヤド編 懺悔録 | | 一 | 口語ラテン語 | ローマ字 | 寛永一六三九 | ローマ | 東京・京都・上智大学、東洋文庫、天理図書館その他 |

写本では、まず慶長十年(一六〇五)に成った『妙貞問答』がある。禅坊主落ちのイルマンで『平家物語』の口訳者でもある不干ハビアンの著で、異教を排しつつキリシタン教義を説いたものである。ほかに寛永年間水戸藩没収教書や寛政年間没収教書に数種の写本があり、東藤次郎氏蔵『吉利支丹抄物』も、慶長ごろの抄写本と言われている。

ローマ字写本には、マノエル＝バレト Manoel Barreto（永禄七年―元和六年 一五六四―一六二〇）[2]が一五九一年に書いたもの（ヴァチカン文庫蔵）があり、十字架物語・福音書・聖母物語・聖徒伝の四部から成る。福音書の邦訳中に見える『舞』は、ジョアン＝ロドリゲス João Rodriguez（永禄四年―寛永一一年 一五六一―一六三四）が、「われわれの文字で印刷した口語の舞」（『日本小文典』）と言い、『日本大文典』や『日葡辞書』に引かれたのと同じであろうが、今日伝存していない。かような佚書では『大文典』に『モルテ物語』『豊後物語』『客人物語』など十四種の名が見え、引例によれば口語体のものである。『日葡辞書』にも、Chr. N. Lib. 8. のような出典注記が見え、少なくも八巻から成る文語本が存したらしい。

以上の諸書について一々解説を加える余裕がないので、大方はラウレス師編『吉利支丹文庫』および柊源一氏の解題（日本古典全書『吉利支丹文学集』上）に譲り、本稿では、おもなものについて述べるにとどめたい。

**註**

1　一五五二年一月二十九日付書翰。アルーペ神父・井上郁二訳『聖フランシスコ・デ・サビエル書翰抄』下巻　一〇一頁（岩波文庫　昭和二十四年）

2　Joseph Schütte: Christliche Japanische Literatur, Bilder und Druckblätterin einem unbekannten Vatikanischen Codex aus dem Jahre 1591. Archivum Historicum Societatis IESU. Vol. IX. (Roma, 1940.) S. 226.

土井忠生「クルス物語」（『国語国文』第二一巻九号、昭和二十七年十月）

## 二

キリシタン文学の特色が教義を中心とするその内容にあることは言うまでもないが、また用字・用語などの上にも特異な点が認められる。まず第一は、日本語を初めてローマ字で写したことである。その綴り方は、ポルトガル語の綴字を基準としたもので、全般的には発音を忠実に写す表音主義に立っている。ポルトガル語では同音を示している

ji, gi を、国語のジ・ヂにあてて使いわけ、ヅにポルトガル語にない新綴字 zu をあてたのなどは、その表記方針を示す一例である。もっともその綴り方は、版本では統一されたけれども、最初から一定していたのではなく、写本類では後までもいろいろ変った書き方をまじえている。

このローマ字綴は、当時の発音を仮名表記以上に明らかに示す。たとえば、fito, fayafune(人・早船)などハ行音にfを専用したのは、ハ行子音がFであったことを示し、aisat, ichijitt(挨拶・一日)など末尾のtは、今日のツとは違う入声の発音を示している。「詑言(わびこと)」「夥(おびただ)しい」「落着(らくちゃく)」など今日と清濁を異にする語は、節用集類でも知られるが、ローマ字綴によればいっそう明確である。かような点で、ローマ字本は当時の重要な国語研究資料でもある。国字本は、漢字平仮名まじりであるが、中に「ぱつぱ」(Papa. 教皇)、「すぴりつ」(Spiritu. 精神)など半濁音符を使い、右のような原語のほか国語に応用した例もあって、慶長三年ごろの版本から見えている。

また、読者の理解に資する配慮がしてあることも、キリシタン版のもつ一特色である。ローマ字本巻末には、「和らげ」があって、本文中の難語句をアルファベット順に並べ、ポルトガル語または平易な日本語で簡単な説明をつけている。国字本でも、漢字の多い『サルヴァトル・ムンヂ』や『ぎやどぺかどる』の巻末には、本文中の漢字漢語を集めてよみ方を注した「字集」があり、それのない書は、つとめて表現を平易にし、なるべく漢語を少なくしてある。さらに原語に対する注解を添えた書もあって、それぞれに一般の理解と教義の弘通とを図るための配慮がなされている。これら注解の性質からすれば、おもに国字本は日本人用に、ローマ字本は外国人用に作られたものであって、『ドチリナ・キリシタン』のように、ほとんど同文のローマ字本と国字本とが並び存するのも、そのためである。

次に文体について見ると、宗門書は文語体、教外書は口語体で、互に区別がある。文語体でなければ正統の文章とは認められなかった当時にあっては、宗門書に文語体を採ったのは自然であるが、中でも法語・談義系統の俗文の体を採っている。ロドリゲスは、日本の文体を内典と外典との二種に大別し、その内典の文体について、

この文体は宗門のあらゆる解説書に用ゐられる。民衆へ説教する時の文体も、救世に関係した事を書いたものの文体もすべて甚だ荘重であって、取扱はれた内容の如何によって程度の差はあるが、わかりにくいところがある。坊主(Bonzos)はこの文体を日常の話し言葉に適応させながら説教に使ふのである。日本語に翻訳した我々の書物もこの文体を用ゐたものが普通に行はれて居り、説教に於いても、この文体の単語や言ひ表し方が適するので、われわれはこの文体に頼ってゐるのである。(土井忠生訳『日本大文典』六六二頁 昭和三十年 三省堂)

と述べ、文末を「有り・也・者也・事也」で結ぶ特徴にまで言及している。ここには右の文体が適する理由にはふれていないが、それは、布教の対象であり、宗門書の読者たる民衆のもつ、文章に対する通念、教義がさわりなく広まる可能性、宗門書の保つべき品位ならびに権威等に対する顧慮が根底になっているものと考えられる。

シャヴィエルの教義書は、協力者パウロ(弥次郎)の無学のゆえに日本人の嘲笑を買ったというが、[1] かような苦い経験を経て、やがて内典の文体におちついたものと思われる。これは編纂にあずかった日本人に、仏教に通じた者が多かったのにもよるが、そればかりではない。すべて編纂出版には、長老の検閲允許を要したのであって、用語や文体にしても協力者の自由な裁量に任せられはしなかったろうからである。

宣教師たちは、仏教に対抗する必要上、早くからその研究を怠らなかった。ガスパル＝ヴィレラ Gaspar Vilela(大永四年?―元亀二年?一五二四?―一五七一?)とともに京都で仏僧の説教を聞いたルイス＝フロイス Luis Frois(天文元年―慶長二年一五三二―一五九七)は、僧が書物の一節を読みながら巧みに説教するのを嘆賞し、今後キリシタンに対する説教にも、聴衆の好みや言語に応じた良法を取らねばならぬと書いている。[2] かような用意は宗門書の形式にも必要なので、宗門書が日本人の間に権威をもって迎えられるためには、内典の文体による必要を認めたに違いない。しかも、教義の根本に相容れない点があるとはいえ、現世厭離、欣求浄土を説く点では彼我相通ずる点もあり、仏僧の説き方によるのが有利な面もあったであろう。以上はフロイスの書簡によって一般的な事情を推測したまでであって、内典の文体を採用するようになったのがこの時に

始まるなどと言うのではない。

宗門書と説教との関係は、前のロドリゲスの記述に見えるが、『サントスの御作業』には、聖徒の祝日の談義に基くかと思われる節がある。その第一巻第一一章「サン＝マチアス＝アポストロのおん祝ひ日の談義」は、章題が異例である上に、他章と違って翻訳の原拠をも示してないのであって、談義の原稿に由来したかを疑わせるのである。また、

今日サンタ・エケレジヤよりサン＝ペイトロ、サン＝パウロ一切人間の三つの敵に対せられて御運を開き給ふ所を悦び申さるる也。（中略）今日の祝はキリシタンの内の第一の祝也。

に始まる第一巻第一章の冒頭は、特定の原拠に基く邦訳とは思えない。右に「今日」とあるのにも注意すれば、当日の談義原稿として何人かがまとめたものと想像される。談義がかかる文章の朗読だけであったかどうかは問題だが、宗門書の文体と近い関係にあったことだけは推察できる。

口語体の文章は、範とすべきものはなかったらしく、ロドリゲスの文体論にも見えない。ただ幸若舞の文体は、上品な談話のと同じだけれども、書きことばをまじえ、「その中のすべての語が談話に使はれるとは限らない」ものであった（『大文典』六六四頁）。これは幸若の詞章を見ればうなずけるように、キリシタン版の口語体に直接の関係があろうとは思えない。従って、『平家』や『伊曾保』は、日本語教科書の使命からしても、直接話しことばをもとにして書いたのである。しかもキリシタンは、京都語とその他の方言とを区別し、かれら自身は常に標準的な京都語を話すべきものとしたから、教科書も京都語に基くものである。口語体のものに、口語訳や翻訳物のみならず、おそらくは創作と思われる『物語』があり、さらに断片的な引用から推して教義に関係のありそうな『モルテ物語』『教化物語』などまで存したことは注目すべきことである。

**註**

1 Georg Schurhammer: Das kirchliche Sprachproblem in der japanischen Jesuitenmission des 16. und 17. Jahrhun-

derts, Tokyo, 1928, S. 23.

海老沢有道『切支丹典籍叢考』一〇頁

2　一五六五年四月二十七日付都発書翰(『耶蘇会士日本通信』近畿篇上、二四六頁　昭和二年　駿南社)

## 三

宗門書に内典の文体が採られた結果、その用語には多くの仏教語が使われた。当時仏教の普及に伴ない、仏教語で通俗語化したものが少なくなかったから、それを使ったのに不思議はないが、宗門書には「利他化導」「願求善縁」とか、「天魔波旬」「退悪修善」など、まだ一般的でなかった語もかなりあらわれ、「色身」「解脱」のごときはごく普通に使われている。また、『日葡辞書』に、

Raicô.(来迎)　Qitari mucô.(来リ迎ウ。)　阿弥陀(*Amida*)または他の仏(*Fotoque*)が霊魂を迎えに来ること、あるいは出現すること。この語はデウスやアンジョ(天使)に適用することができる。

Tacutai.(托胎・託胎)　Yadori faramu.(ヤドリ胎ム。)　ある人の腹の中に肉体を生ずる、または人体がやどる。これは一般に神(*Camis*)や仏(*fotoques*)について言う時に使われるが、われらの主キリストに適用することができる。例、Iesu Christo Sancta Mariano gotainaini gotacutai nasareta.(ゼズ＝キリシト、サンタ＝マリヤノ御胎内ニ御托胎ナサレタ。)　キリストが処女マリヤの胎内に肉体として根ざされた。

とあるのなどは、仏教語に対する態度を示すものである。

かようにキリスト教的に限定し適用したものは、仏教語に限らない。特に「天」と他語との複合語、たとえば「天道」「天帝」「天恩」「天命」「天忠」「天心」の類に著しい。ローマ字本の「和らげ」にデウスに関連した意味だけ注したのは、特定の本文に対する注解として自然である。さすがに『日葡辞書』は一般の「天」「帝王」に関する意味をも



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

示しているが、それでも「天鑑」はデウスのみそなわす意とし、『句双紙』から『金句集』に採られた「天鑑私なし」の句も、デウスは人に分け隔てなく、万事を厳正にみそなわすと説明している。同じく『日葡辞書』に従えば、「御作者」「御作の物」「天尊」など「教会内で通用する語」があり、「天主」「尊主」「十二姓」「金牛子」など「教会の書物用語」がある。また、次のような説明も見えている。

Iuaibi.(祝イ日)　祭日・祝日、または聖なる日。教会内で通用している語。それというのは、日本の祝祭日は Iuaino fi(祝ノ日)と言われるからである。

宗門書にもまれに「祝の日」の例がないではないが(『ぎやどべかどる』下巻、五九丁オ)、一般には混同を嫌って意識して使い分けたらしい。これらの語が教会の専用語かどうかはなお検討を要するにしても、信徒間では上の意味で慣用されたのであろう。右の「祝ひ日」や、「御作者」「御作の物」などは、初期のものからごく普通に使われているから、比較的早く固定していたのかもしれない。

新造の漢語は、案外少ないようであるが、『日葡辞書』は、邦訳する意の「和飜」を、教会で複合語として作られ、使われる語としている。村岡典嗣氏が、聖アウグスチヌスの語に基く新造語とされた「山筆海硯」などはこの類であろう。[1] 固有語では、「与へ手」「扶け手」「動かされ手」「悦ばせ手」「御作なされ手」など、「手」を自由に使い、「ローマの御取合せのあり手」(『サントスの御作業』二巻、一〇二頁)の例さえある。また、用言の連体形「頼もしき」「賢き」「老する」「死する」や、形容動詞の語幹「明らか」を名詞として使った例があるが、『日葡辞書』には収めてない。「御大切に燃え立つ」「天の事に燃え立つ」などと多く使われる「燃え立つ」も、inflamar, ferver などに対応する新しい用いざまのようである。ともかく、この種の語が漢語に少なくて固有語に多いことは、漢語の尊重された時代であるだけに、特に注意すべき現象である。

また一面には、早くから原語をも使った。宗門用語のことは伝来当初から問題になったが、教義が曲解され、仏教

と混同されるのを避けるために、キリスト教独自の観念を示す語は、原語を使う方針を確立したのである。『日葡辞書』に、

Xeiqen.(聖賢)　他人に交わり、他人にほどよくするような徳と智慧。また、さまで普遍的(*universal*)でもなく、それほど純一完全(*quilates*)でもない徳・智慧。

とある説明の後半には、キリスト教の立場からする批判を含んでいると見られ、こうした態度も原語主義をとったそれに通ずるものであろう。原語は、一般に初期のものほど多く、後には次第に少なくなって、使われる語も大体固定したようである。『信心録』には「カメロ」(Camelo. 駱駝)や「セレボロ」(Cerebro. 脳髄)のような語をも含むために、固有名詞を除いても約二六〇語を数えるが、改訂版『ドチリナ・キリシタン』では約一三〇語、国字本『こんてむつすむん地』ではわずか六〇語足らずである。ロドリゲスが『大文典』に採録した一一五語などが、普通に使われたものと考えられるが、それは宗門関係の語ばかりである。原語は、ポルトガル語が主で、ラテン語やスペイン語もあるが、いずれも日本語化して使い、ローマ字本では原綴のままだが、国字本では Pater を「ぱあてれ」、Christian を「きりしたん」と書いた。「コンチリサンといふ後悔の理り」(『コンテムツス・ムンヂ』一巻、四頁)、「テンタサンといふ悪の勧め」(『同』一巻、三〇頁)のように説明を添えたのや、まれに「セレモニヤの法事」(『サントスの御作業』一巻、六五頁)、「レトリカの弁舌」(『同』二巻、六八頁)のように文選読み式のものもある。日本語との複合もかなり自由で、「スピリツアル事」「オリヂナル科」などのほか、「エスピリツアルおん夫」(『同』二巻、二一九頁)、「スピリツアル万紅千紫」(『同』二巻、二八四頁)の例さえある。尊敬の接頭辞は、「御パッション」(受難)、「御オンタアデ」(意志)のように、漢語なみに「ご」を冠するのが普通で、「おんエスポソ」(夫)のようなのは珍しい。複数の接尾辞も、「サントたち」「ジュデヨら」などと使い、原語の複数形につけて、「サントスたち」「アンジョスたち」とした例も少なくはない。

当時の俗語と見られるものは、文語本にも珍しくない。「憲法」「活計」「賞翫」「情識」「進退」「用所」「高上」「不祥」「本とする」「しね」などについては、すでに橋本進吉博士や吉田澄夫氏が説かれたとおりである。(2)「述懐」「縁辺」「談合」「足んぬする」などもそれで、「腭を離す」はまだ辞書に収められていないようだが、

武士を遣はしおん腭を離させ給ふなり。(『サントスの御作業』二巻、一三九頁)

のような例があって、「和らげ」『日葡辞書』ともに、女の首を斬る意とする。右も他の例(二巻、一三七・一三八頁)もともに女の場合である。国内側文献にはまだ見いだせないけれども、『拉葡日対訳辞書』の中にも例(Decollo の条)があって、やはり俗語かと思われる。

口語本になると、「みちれないいたづら者」とか、「顔うち赤めてとちめく」「跳ねびちたいて喜ぶ」、あるいは「澄みちぎる」「あどをうつ」とかいうような生き生きした話しことばを写しとどめている。

**註**

1 『吉利支丹文学抄』三九頁。同書「吉利支丹文学用語抄」三五頁

2 『文禄元年天草版吉利支丹教義の研究』「用語について」九三頁。『天草版金句集の研究』一三九頁以下(昭和十三年 東洋文庫)

## 四

次に作品のおもなものについて、簡単な解説を加えよう。まず、現存キリシタン版中最も古い『サントスの御作業』は、表紙に「サントスの御作業の内抜書」とあり、二巻から成る。十二使徒をはじめ多くの聖徒の伝記の邦訳である。第二巻後半の「マルチリョのことわり」は、ルイス＝デ＝ガラナダ Luis de Granada(永正元年—天正一六年 一五〇四—一五八八)の著 Introduçan の第一六章以下によるという(序文)が、多くはやはり殉教者伝で、その末の「右に記録したるマルチレスの御作業についての観念の事」ほか一章が、全篇をまとめる形になっている。諸書からの「抜書」であり類纂であって、

形式的に不統一な点もあるが、編述の目的は、信仰生活の鏡としての聖徒伝をまとめるとともに、殉教の意義とそれに対する心構えとを教えるにあった。すなわち、宗門禁圧の情勢が殉教をも予想させるほどであったので、それに備える意図がこめられていると考えられる。

聖徒伝の邦訳は、すでに永禄九年(一五六六)ヴィレラが堺で作っていたが[1]、そのような古い翻訳が写本で伝わっていたことは、前述のバレトの写本によって知られる[2]。現存の加津佐版は、バレト写本そのままではないけれども、この種の写本に基いて印刷されたろうことは容易に想像できるところである。

注記によれば、全三十九章のうち四章(一巻一六・一七章、二巻四・五章)は養方パウロ、残り三十五章はその子法印ヴィセンテの翻訳というが、両人とも外国語に通じてはいなかったらしいから、外国人宣教師の訳文に手を加えて、日本文として整えた程度のものであろう[3]。その本文には、時に訳文臭を残したところや、前後の照応しない点などもないではないが、一般に雅馴な文体であって、朗読に堪える部分も少なくない。概して言えば、パウロ訳の方がヴィセンテのよりもこなれている。聖徒伝の部分には、内容に即して和文脈のかった、物語風の筆づかいが見られる。

しかれば、ある港へ出で給ひ、おん船に召して、遙かの波濤を凌ぎ給ふところに、船中にまします御台は、比類なき美人にてわたらせ給ふことを、かの船頭見参らせて、静心なくあこがれ、いかにもしてこのおん方を奪ひ取り申さんと、隙なく思ひ工むなり。さてその国に着き給ひ、おん船より上がり給はんとし給ふに、船賃に渡さるべき物少しもなければ、事を左右に寄せて、御簾中を奪ひ取るなり。一往詫び給へども、いかでか同心致すべき。

(パウロ訳『サン＝エウスタキヨの御作業』一巻、二七九頁)

かような文章には、典拠を求め得る部分も見いだされる。

これは姫宮にてまします故に、常には金屋の内に粧ひを閉ぢ、鶏障のもとに媚びを深うして、羅綺にだも堪へ給はざる風情なれども、(二巻、二〇四頁)

の部分は、勾当内侍の様体をえがいた『太平記』(二〇巻)の文章を採ったのである。また、「吹く風の草木を靡かすが如し。」(二巻、二四頁)、「重ねて辞せば悪しかりなんと存じ」(一巻、二〇八頁)、「天に仰ぎ地に伏して悲しみ給へどもかひぞなき。」(二巻、一四頁)など、『平家物語』に関係づけられるものもある。

あるいは春、夏日照り、秋、冬大風、大雨よからぬ事ども打ち続き、五穀悉くならず、空しく春耕夏植の営みあって、秋斂冬蔵の民徳なし。(二巻、二四頁)

とあるのは、『方丈記』によったものに違いない。かような例は、ヴィセンテ訳に見えて、パウロ訳には見えないようである。なお、ヴィセンテ訳には、「ご同心なさるる」(二巻、五七頁)、「命を生けう」(同上、二七頁)、「あるまじい」(同上、二六頁)など、会話の文中に口語の言い方をまじえていて、特に第二巻一章のジョゼフ伝に多い。また、「随身しける五穀ども皆とりどりに水茎をかき集むれば、」(二巻、二九頁)、「いかでか君のおん前にて科なきいはれをゆふ花のかげ唇を動かすべき。」(二巻、三六頁)のような掛詞を用いた例もあるが、パウロ訳には見えない。

『ドチリナ・キリシタン』は、同名のキリシタン版が四種現存しているが、いずれも師弟の問答の体裁をとり、教義の大綱と信徒の守るべき掟などを、初心の信徒向きに説いたものである。まず天草版ローマ字本は、十一章から成り、「ことばは俗の耳に近く」(序)平易を旨とした俗文で書かれているが、簡潔でひきしまっており、俗語をまじえつつも教義を説くにふさわしいものになっている。

弟　われらが敵とは何たる者ぞ。

師　世界、天狗、色身、これなり。

弟　この三つの事を何しに人間の敵とは言ふぞや。

師　敵とはアニマに頻りに科を犯さする事叶はねども、悪を勧め、またその道に引き傾くる事叶ふによって言ふ

なり。

弟　かの三様の敵より起すテンタサン（誘惑）をデウス止め給はぬ事は如何。

師　それと敵たひ、デウスの御合力を以て利運を開き、またその利運の御勧賞を与へ給はんためなり。（一一頁以下）

本書は、ある成書の邦訳ではなくて、先人の書から「肝要なる所を択び取って版に鏤め」（序）た新編の書である。この種の教義書には、早くシャヴィエルの編著があり、それは後の教義書の根幹となり、天草版にもいくらかの関連をもつものと考えられる。[4] 右と同年の天草版と推定されるバルベリニ文庫蔵国字本は、用字が違うほかは、語句の違いが二三あるだけで、同文といってもよい程度のものである。

慶長五年（一六〇〇）版のローマ字本と国字本とも同文であるが、この二書をさきの一類に比べてみると、ことばをいっそうやさしく改めている。たとえば、旧天草版の「済度利益あるべきために」（二章）を、「すくはれ奉らんがために」、「御入滅の時」（六章）を「死し給ふ時」とするなど、漢語を和らげたほか、「おおれよ（Oleo）」を「あぶら」、「ぐらうりや（Gloria）」を「御ほまれ」とするなど、原語を訳語に改めたのが少なくない。原語を残したものでも、「メモウリヤとておぼえたる事を思ひ出だす精」（六章）のように、本文中に説明を添えたりしているのである。

内容にも変動があり、旧版末尾の食前食後のオラショ（祈禱）と「諸のキリシタン知るべき条々の事」とは、新版では除いてある。これは同年版『おらしよの飜訳』に譲ったのであろう。かように簡略にした部分もあるけれども、それよりは旧版を増補したところの方が多い。たとえば、旧版で「この十五箇条の題目は板木に開きたる一紙にあり。」とだけで、「一紙」に譲ったのを、新版では「貴きヴィルゼン・マリヤのロザイロとて百五十遍のオラショの事」の一節を加えている。日曜日と教会所定の祝い日には諸職を止むべしとの掟に対する除外例を、旧版は、「但し遁れぬ子細ある時は、所作をしても科にならざる事あり。」（七章）と抽象的に述べたにすぎない。これに当る部分を新版について



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com